

中海は宝物

未来守りネットワーク活動記

<4>

私たちの活動の柱に、アマモとコアマモの藻場再生による中海浄化があります。アマモ場の再生事業は、官民一体となって全国各地で行われ、水質浄化や魚介類などの増殖に寄与しています。

今回は、このアマモとコアマモについて、皆さんに知ってもらいたいと思えます。アマモの和名は「リュウグウノオトヒメ」ノモトユイノキリハズシ」といいます。植物名としては日本一長く、その地下茎をかむと白みがあるのが甘藻(あまも)

誕生物語 ④

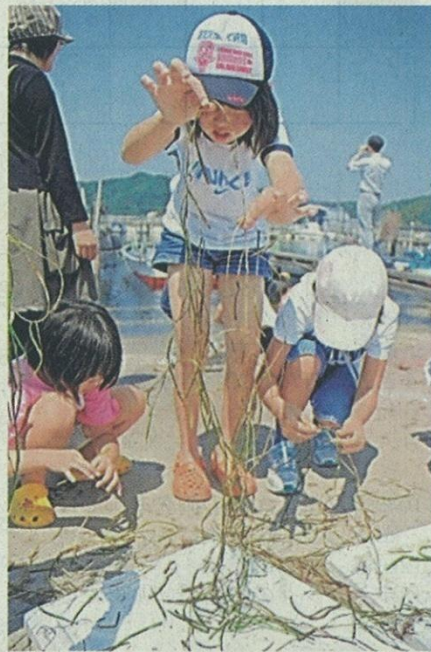
の名が付いたそうです。

中海では水深1〜2メートル、生育し、葉は幅4〜6センチ、地下茎から葉先までの長さは10〜60センチになります。砂泥地に地下茎を伸ばして育つ多年草で、4〜6月ごろ

アマモ場再生に協力を

に白い花を咲かせ、結実して米粒大の黒い種子を作ります。

アマモ場は魚介類の餌場や外敵からの隠れ場になり、サルボウガイ(赤貝)の稚貝が最初に付着する場



港境の採取するアマモの種子。かつてはアマモもコアマモも中海に群生していた。

所としても知られていまを吸収し、水質を浄化する重要な役目を果たしている。

アマモの葉の表面に付着する珪藻(ケイソウ)も光合成をします。酸素を発生して海底付近の海水に供給する。窒素やリンの肥料として使われまし

た。このほか、乾燥させて便所のちり紙代わりにしたり、お産のとき産小屋に乾燥させたアマモを敷き、そこに産み落としたりする使

余談ですが、産小屋とは母屋とは別に設けられた小屋です。妊婦は産気づくと産小屋に入り、室内にぶら下がった太い綱にすがって

た。このほか、乾燥させて便所のちり紙代わりにしたり、お産のとき産小屋に乾燥させたアマモを敷き、そこに産み落としたりする使

余談ですが、産小屋とは母屋とは別に設けられた小屋です。妊婦は産気づくと産小屋に入り、室内にぶら下がった太い綱にすがって

苦痛をしのぎながら出産。産後もここで煮炊きし、しばらく生活しました(樫村賢二著「里海と弓浜半島の暮らし」)。

コアマモはアマモに似た多年草ですが、葉の幅は狭く半分くらいです。水深20センチから1メートル、ごく浅い砂泥地に生育します。かつてコアマモは、アマモとともに中海の浅場に藻場を形成していました。現在、中海で最大の群生地は大橋川河口域にあります。

コアマモは全国で激減し、絶滅危惧種に指定した都道府県もあります。今では貴重な植物になっているアマモとコアマモの藻場の再生に、皆さんも協力していただきたいのです。(未来守りネットワーク理事長・奥森隆夫)